

平成 24 年 2 月 9 日

株主、投資家の皆様へ

フィンテック グローバル株式会社
代表取締役社長 玉井 信光

第 18 期第 1 四半期の概況につきご報告申し上げます。

現状、厳しくはありますが、将来につながる諸施策を展開しつつ前進しております。社内も相変わらず「厳しい目つき」が飛び交ってはおりますが「光」あるいは「夢」といった本来の輝きもアンビシャスという言葉に集約されつつ形をなそうとしているように見えます。

事業の黒字転換までに時間を要する投資運用事業（アセットマネジメント）や地方自治体コンサルティング事業もそのレゾナードールはしっかりと確立してきておりますが大幅な赤字となりました。プリンシパル投資や再生支援を中心とした証券部門の好調がなんとかこれら先行投資的な新規部門の欠損を埋めているといった状況です。

当社を訪問された国内外の取引先の皆様の多くが「投資を主業務としている会社としては人が多い」と感想を漏らされます。その通りで、投資だけやっていくのであれば 10 名程度で十分まわります。政府の緊急雇用対策上の臨時職員の方々も含めれば最大 100 名程度の仲間が社内にはいます。最大の従業員数は地方自治体コンサルティング部門です。次が投資運用部門です。儲かっている証券部門やプリンシパル投資部門は少人数精鋭で事業展開しております。しかしながら、今のグループの誇りはこれら赤字部門の投資運用部門や地方自治体コンサルティング部門なのです。精神的な誇りで終わるのか、はたまたグループの事業基盤となっていくのかはこれからです。11 月に設定した新たな投資ファンドは成績も好調で新規および既存の投資家との関係強化に貢献しております。公会計分野で独占的な地位を保持する地方自治体コンサルティング部門は新エネルギー政策や農業政策といった我が国の将来に大きくかかわる分野への参入を非常に円滑にする可能性が高まっております。

当社グループを経常的な黒字体質に直ちに变革させることはそれほど難しいとは感じておりません。まさに先述してきました通り「将来につながる施策分野部門」を即座に凍結撤収せしめれば、なかなかの少人数高収益企業になるとは感じますが、とてもとても従来の姿には戻りません。『成長は期待できないが配当だけはコンスタントに出せる企業』、これはわたくしの経営スタイルではありません。今しばらくご猶予をいただきたくお願い申し上げます。

幸いにして、本年 1 月には 4 年近く取り組んでまいりました FinTech Gimv Fund（ベンチャーキャピタル投資部門）で初のエグジットに成功しました。既投資先企業も育ってきております。新たなる事業創設支援対象の御引き合いも増加しております。今は将来に向けての忍従の時期であると考えます。

株主、投資家の皆様におかれましては、引き続きご支援のほどよろしくお願い申し上げます。